

第二章 心の教育



子どもたちの心を開く

教育は、教師と生徒が向き合って行われるものです。ここでは教師が生徒に教えるという一方通行な関係ではなく、双方向的な、お互いに心を開いた関係が前提として求められることでしょう。

国語や数学の知識を与えることだけではなく、まず子どもたちの心を開き、そこに思いやりなど人間として必要な精神や、生きていこうとする情熱を吹き込んでやることこそが、教師や学校の役割ではないかと思えます。

一口に「子どもたちの心を開く」といっても、一筋縄ではいきません。子どもたちと向き合う日本中の、いいえ、世界中の人たちが、日々、この課題に取り組んでいるといっても過言ではないのでしよう。

昔から教育学の専門書もたくさん出ていますが、私は初めて教壇に立つことになった五十年前から、手探りで、きわめて自己流の方法を実践してきました。

前の章でお話したように、長崎はキリスト教の背景を強く持つ場所ですが、かつて江戸幕府がキリスト教の信仰を禁止していた時代のなごりは戦後になってからも完全に拭われることはなく、ずっとその土地に脈々と横たわり続けていました。キリスト教を邪宗門、つまりよこしまな宗教と

する空気は、私が教師となってもどった一九五五年（昭和三十年）のころにはこの地にまだ色濃くただよっていたのです。地方都市ですので、空気の循環が内部で完結してしまいがちで、なかなか外部との空気の交換が進みません。

しかし、そうした空気が、若い私を奮起させたように思います。当時の私は、絵に描いたような熱血教師でした。なにしろ、たくさんの子どもたちを前にして、「彼ら全員を改心してみせる。」という野心に燃えていたのです。子どもたちの心をしっかりと入れたものに入れ替えてやろうという「改心」のほか、キリストの教えに気付いてもらう「回心」を期待する気持ちもありました。そして、そのためには、まず「子どもたちの心を開く」ことだと考えました。

当時、私が担当した授業は倫理社会や宗教などでした。中には、「倫理社会も宗教も大学受験に関係ないし、金儲けの役に立つわけではない。」と露骨にやる気のなさを見せる子どももいました。が、私は事前に授業用のノートをつくって工夫を凝らしたり、宗教の時間用として手づくりの楽譜なども用意したりしました。だいたいあとになってから、同窓会で卒業生と歓談していたおり、当時の生徒の一人が、

「田川先生の授業は、本当によく歌う授業でしたね。学年の終わりのころになると、分厚い、立派な歌集ができあがっていましたよ。」



海星学園では、33歳のときに副校長を命じられました。

と笑って話してくれたことがありました。

子どもたちの気持ちをつかむために、いろいろなイベントも企画しました。

みんなでキャンプにも出かけました。スイスでは夏休みになると、先生や学生たちが一緒に山や海へ行つて、勉強はもちろん、遊んだりスポーツをしたりして自然の中で時間をすごす、コロニー・ド・バカンスに出かけましたので、同じように日本の子どもたちと楽しんでみようと思いました。現在はアウトドアという娯楽の分野が確立していますが、昭和三十年代の、しかも田舎のことですから、子どもたちにとつても新鮮だったことでしょう。家庭の事情でお金を出すのがむずかしい子どもの分は、私がアルバイトをした分でめんどうを見ることにしました。教会へ出かけていて、お話をしたときにいただく謝礼などをこれにあてたのです。

海星学園は長崎港を一望する山手にあり、近くには海水浴ができる海岸もありましたので、子どもたちを海にも誘いました。山間の地方からやって来て、海に入るのは初めてという子どももいて、喜んでくれたのですが、中にはふだんから学校にわらざうりやゴムぞうりをはいてきていて、海パン（当時は水着といわず、海水パンツといっていました。略して海パンです）など買ってもらえなかったり、小さくなってしまっていたりした子どももいました。そこで私はデパートに行つて、いろいろな色やサイズの海パンを買い込み、学校に持つていって子どもたちの前に積み上げました。

色とりどりの海パンを前に、子どもたちは歓声をあげて喜びました。

お茶やお菓子の仕事

現在もそうですが、私はよく、みんなが集まったときや、子どもを個別に呼んで話をしたいときなどにはお菓子を用意しました。

「ねえ、クッキーがあるんだけど、食べない？」

食べ物でつるといふのは違います。友達どうし、親子、会社の同僚や部下と上司など、どんな関係であっても、会って話をするときにはお茶やお菓子を自然に置いたりするでしょう。そのことで話はずんだり、距離が縮まったりするものではないでしょうか。テレビを見てみると、よく男性が女性をお茶や食事に誘うシーンがあります。相手の気持ちを開かせたい、こちらに向けて開いてほしいと思うときには、やはり食べ物や飲み物をあいだにはさむものですね。実際、一緒に食べたり飲んだりしているうちに相手も自然に心を開いてくれるというものです。また、お菓子やお茶がうまく間をもたせてくれたり、相手が手を伸ばすかどうかを見ていて、こちらにどのくらい気持ちの距離を置いているかを、なんとなく測ったりすることもできます。

問題児をたしなめるときには、部屋に呼んで

「おせんべい、どう？」

と向けても、相手はかたくなになっていて、なかなか手をのばしません。そんなときは、

「あさって、日曜日だけど、お昼前にもう一度来てくれないか。ラーメンでも一緒に食べようよ。」

といって、とりあえず帰して日曜日に部屋にいと、こちらもおながすいてきたなところになって、ひかえめにドアをノックする音が聞こえてきます。

同窓会の席などで当時の思い出話になると、

「あのとき、アイスクリームをごちそうしてくださったのが、本当にうれしかったんです。」

「修学旅行のときに買ってくださったお菓子、おいしかったですね。」

という話になります。いろいろと話を聞いてみると、単にお菓子がうれしかった、おいしかったということではなく、その体験が子どもたちの中で「先生」との距離を縮め、「学校生活」に彩りを添える機会となっていたことを実感します。子どもたちの心をこちらに開かせるといふ重要な仕事を、アイスやお菓子が、しっかりとしてくれたなと感じ入ります。

時には大人の論理を

当時、私はそうしたお茶やお菓子などを用意するための「出費」をすべて自分のお金でまかないました。私は生涯、独身を貫き、資産を持たないことを誓った身ですから、家のローンや子どもの学費のためにお金をとっておく必要があります。ですから、いただいたお給料のほとんどは、子どもたちと過ごすために使いました。

お金がなくなると、アメリカの知り合いの神父に手紙を書いて、ドルを送ってもらうこともありました。これも、キリスト教やマリア会の精神という世界的なつながりを背景に持つ人間だからこそできたのかもしれませんが。

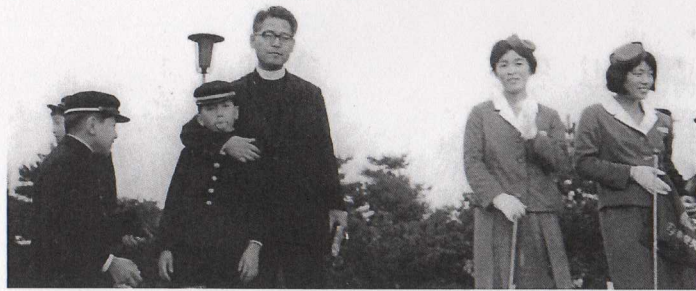
さきほどお話ししたように、神父として、近くの教会に出かけていってお話をしてお金をいただくこともありましたが、それも全部、子どもたちのための出費にあてました。

いつか、一人の卒業生が「海パン」の一件をおぼえていて、当時のことを話してくれたことがあります。私が海パンの山を前に

「どれでも、自分に合うとば、持って行ってよかぞ。」
という、みんな口々に



学校では神父としてミサを開くこともありました。写真は野外ミサの模様です。



修学旅行での1コマ。心を開いているのか、そうでないのか…。

「うれしか！」

「先生、ありがとう！」

と叫んで手に取り、喜ぶ中で、その卒業生が私に

「先生は金持ちばい！」

といったそうです。私が

「そうかな。でも、もうないよ。また教会に行つて黙想会を開いて、もらつてこようか。」

と答えると、そばにいた別の子どもが、

「黙想会つて、もうかるとですねえ！」

とおどけていました。

「そうだよ。頼まれて説教ばしにいけば、お金がもらえるときさ。」

と私が答えるのをそばで聞いていて、その卒業生は複雑な気持ちになったといいます。私が冗談半分にこたえているのだとわかっているけれども、自分の面持ちが険しくなっていくのをおさえることができなかつたというのです。おだやかならぬ形相で自分をにらみつけている彼に気づいた私は、

「お金がいるんだよ、何かを実現すつためには。理想は理想のままではいかんとぞ。なんとしても形を与えんば、いかんとやっか。」

といったそうです。彼は、そのときは決して釈然とはしなかつたものの、そのときの私の怒つたような、悲しそうな表情と、圧倒的な気迫を、その後もずっと忘れることができないうのだと話してくれました。

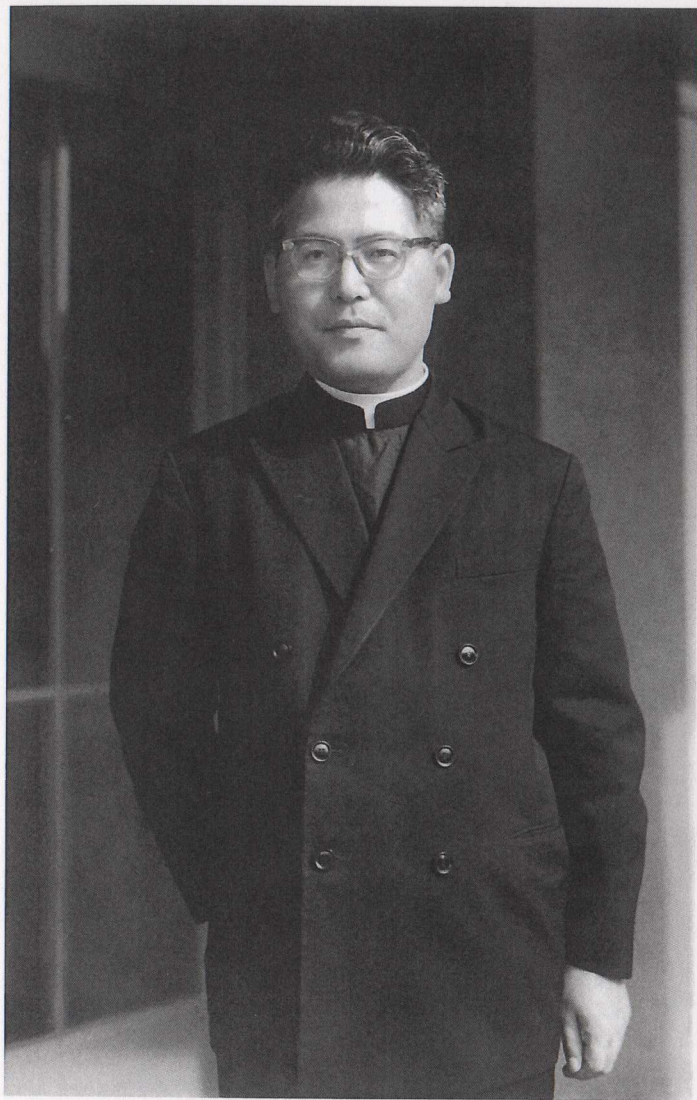
校長先生が声をかける

長崎での熱血教師としての毎日も五年がたとうとした私のところに、東京のマリア会から転勤の辞令が届きました。東京へ出て、九段の暁星学園中学・高等学校の校長をつとめるようにとの指示でした。

三十五歳というのは、学園の長い歴史の中でも最も若い校長だつたようです。赴任してみると、自分よりも年上の先生や、中にはかつて自分が生徒として教えを受けた先生も何人かいて、最初はとまどうこともたくさんありました。

当時のことについて、機会を見つけて卒業生たちに話を聞いてみると、「田川校長」は、やたら生徒たちに声をかける校長として記憶されているようです。

普通、校長先生といえは、朝礼をはじめ始業式や卒業式など特別な儀式のときに姿を現すほかは、校長室でハンコを押したり、職員室で先生方に指導をしたりして、あまり生徒と接触の機会が



東京・九段の暁星学園中学・高校の校長に就任したころ。

ないというのが一般的なイメージでしょう。

しかし、それまで日々、子どもたちとの接触の中で一人ひとりの心を開かせていくことに気持ちを持っていて私は、校長となってからもひきつづき、日常的にその努力を続けていきたいと考えました。校長ですから、授業を持って教室で子どもたちと直接向き合う時間はなくなりましたが、朝校舎の入り口や校門のところ立って、登校してくる子どもたちに声をかけたり、休み時間に校庭へ出ていって肩をたたくことはできません。

子どもたちも、最初はとまどったようです。朝、校舎の玄関などで校長先生が呼びかけてくること自体、意外だったことでしょう。ことに私は、

「○○君、おはよう。」

「やあ、○○君、元気か？」

と、名指しで声をかけたのです。

私は、子どもたちの顔と名前をできるだけたくさん記憶しておくように一生懸命に「予習」をしました。本人を目の前にしてどうしても名前が出てこないときは、くやしくて、何度も「復習」をして頭に入れました。

さらに、子どもたち一人ひとりの状況や事情も、できるだけ頭に入れておくようにしました。病



東京・九段の暁星学園。現在の校舎に建て直される前のころの光景です。



登下校時、休み時間、私は子どもたちのところへ行って、彼らに声をかけ、肩をたたきました。

気で休んでいた子どもが出てきたときには

「もう大丈夫か。よかったな。」

と声をかけ、家庭に不幸があった子どもには

「おうちの人は疲れていないか。気を付けてあげなさい。きみも頑張れよ。」

と肩をたたきました。

声をかけられた方は、かなり驚いたようです。校長先生が自分たちのことをそんなに知っていてくれているとは、普通は思わないでしょう。でも、それだけに子どもたち一人ひとりの中で、先生や学校というものに対する印象は確実に変わっていき、同時に、それがこちらに対して心を開いていくきっかけとなっていたようです。

私は現在も、日々、時間の許すかぎり子どもたちのところへ行って声をかけ、肩をたたき、はげまし、時に叱って、彼らの一人でも多くの心を開く努力を続けています。

W君のこと

教育の世界に身を投じて半世紀がたちますので、そのあいだに関わった子どもの数ははかり知れません。しかし、何十年とたつたいまでも、忘れることができない生徒というものがいます。



こうした体をはったコンタクトは、80歳を越えたいまでは難しいものがあります。しかし、子どもたちと触れ合う時間をできるだけたくさん持ちたいという気持ちは、いまままったく変わりません。



一人の神父として、卒業生からこうして結婚式に呼ばれることがあります。かつての教え子の幸せを祝福できることは、本当にうれしいことです。

東京の暁星学園に赴任してしばらくしたころ、私は故郷の母を亡くしました。そのおりに長崎の実家に帰ったときのことです。

葬儀のあとでいろいろと用事をすませていると、母の主治医として力をつくしてくれた先生が、一人の少年を伴って、相談にのってほしいと声をかけてきました。先生が挨拶を促すと、少年はちょこんと頭を下げました。それがW君との出会いでした。

相談の趣旨は、「不良」のわが息子の面倒を東京の暁星高校で見てもらえないだろうか、というものでした。

何十年かたつてから、何かのときに当時のことに話が及んだ際にW君本人がいうには、私はそのとき、初対面のW少年に

「なんだ。汚いじゃないか。けんかも強そうだな。」
といったのだそうです。

W君自身が後に語ったところによれば、確かに丸坊主だし、田舎の町のことだから汚い格好もしていた。けんかばかりしていたから目つきも悪かっただろう。だから、高校の先生などはまともには見てくれない。腫れ物にでもさわるように、妙におべっかを使った物のいい方をする。だから、この東京の学校の校長も、せいぜい「東京で、頑張ろうね」、「いい子になるようにしようよ」など

と声をかけてくるものと多寡をくくっていたそうです。

だから「汚いじゃないか」や「けんかも強そうだな」はまったくの拍子抜けで、しかしそれでムカツときたかという、逆に妙にうれしかったのを覚えているのだといひます。

当時のW少年は、中学時代から有名な不良として長崎中にその名をとどろかせていました。中学を卒業して地元の高校に入ってからけんかにあけくれ、高校一年生の夏には早くも退学処分になっていた。

心配したご両親は、W君を佐世保の教会に預けました。いってみれば、保護観察のようなものです。

W君は三か月後に長崎の実家にもどり、翌年、もう一度、長崎で受験をしておすことになって勉強をはじめましたが、それから夜中に仲間から連絡が入っては出かけていくような日々が続いていました。

翌年、W君は、受験した学校は私立も公立もすべて不合格になりました。成績とは別に、やはりそれまでの彼自身の「ふだんの行い」が地元の学校中に知れわたっていて、そのために受け入れてもらえなかったというのが実情だったようです。

母の葬儀の日に相談を受けたあと、受験した学校の中に海星学園があるというので確認してみると、試験の成績は合格のラインに達しているのに、やはり素行の問題から不合格とされてしまったようです。

タバコを吸った、けんかをしたと武勇伝には事欠かないW君でしたが、ともかく高校にもどすために、ひとまず海星に合格させ、そのあとで東京の暁星に編入する形をとることにしました。海星にいても、いままでの交友関係もあり、それを断ち切っていきなりまじめにやるのも難しいだろうと思つたのです。

それほどのワルをどうして、と思われるかもしれませんが、話を聞くと、彼はむやみやたらに暴力をふるっているわけではないようでした。仲間がやられたりしたと聞いてしまうと、いても立つてもいられず、仕返しに走ってしまっているようでした。東京へ移つてからも、学友が先輩に脅かされたり、近隣の学校の生徒から友人が金品を巻き上げられたりしたときには、じつとしてばかりはいられなかったようです。

W君は、暁星に移つて最初の模擬テストでは、学年で十番に入る成績をおさめていました。「もう、あのときは、そのことを早く田川校長に伝えたくて！」

と、彼はいまでも、あのときのことを思い出しては、走りださんばかりの形相で話してくれます。しかし、やがて親元を離れた緊張感が多少ゆるんできたのか、成績が下降線をたどるようになり、

高校三年生の十月には、ふたたびW君のけんか騒ぎが教職員会議で取り沙汰されるようになってしまいました。

私は彼を校長室に呼び、一喝しました。

「しばらく学校へ来るな。来なくていい。今度問題を起こしたら、退学しかないぞ。」

そして、一人の先生にお願いして、しばらく彼を預かってもらうことにしたのです。

当時の彼は、自分の成績が学年で下から二番目であり（最下位の生徒は長期留学中でしたから、実質的には彼が最下位であることは、本人もわかっていました）、担任の先生からはこのままでは留年は必至であり、大学受験どころではないと、厳しい言葉をなげつけられていました。

ところが、彼はそれを聞いて奮起しました。彼は心の中で思ったそうです。

「校長の顔だけは、絶対につぶすわけにはいかない。」

後にW君が私の前で遠くに目をやりながら、かつてのそうした思いについて話してくれたとき、私も知らずと目を細めて、遠い昔の自分のことを思いだしていました。

最初にお話ししたように、私は十一人兄弟の十番目として生まれました。私の両親は十一人の子どもと父親と祖母のために、朝から番まで畑に出て野菜をつくりました。母親は畑仕事の合間に十四人分の食事をつくり、洗濯をし、さらに野菜を背負って町に売りに行きました。そのお金で食べ

物を買ひ、また果物の残り物などを買ってきてくれました。そして、晩は晩で夕食の片づけをし、翌日野菜を売りに行く準備をしています。

私はW君の話聞いていて、夜中の十二時ごろになってから縁側に座ってロザリオを切つて（お祈りの際に胸の前で十字架を切る仕草）やっと床に入る姿を見て、この母親のために自分もまじめにやらなければと胸に決めた日々を思い出していたのです。

また、小学校を出てから入ったマリア学院での厳しい毎日のことも思い出されました。マリア学院は修道院ですから規律がたいへん厳しいところで、最後まで残るのは、十人に一人ぐらいでした。しかも子どもの集まりですから、いじめられたり、ぶたれたり、けんかをしたりして、つらい思いをすることも少なくなかったのです。勉強していると「こいつは、まじめだ」と、理不尽ないじめを受けることもありました。寮での生活ですから、逃げ場もありません。小学校を出たばかりの子どもにはいささか苛酷ともいえるそんな環境にあつて私は、

「母親を喜ばせたい。ここを辞めて親に恥をかかせてはいけません。」

という思いから辛抱を重ね、努力を続けました。

私はW君の話に耳を傾けながら、人を思い、静かに情熱をたぎらせていたかつてのW少年に、自分自身の少年時代を重ね合わせていたのでした。

その後、W少年は本屋へ走って問題集を買い込み、文具店で大きな模造紙を買ってきて点数表をつくり壁に張り、朝から晩まで問題集と格闘したそうです。眠くなつてくるとカミソリで左腕を切りつけ、そこに唐辛子をかけて眠気をさましたといいますが（当時この話を聞いていたら、私は彼を猛烈に叱りとばしていたと思います）。

いささか乱暴にすぎますが、ともかく文字通り血のにじむような努力の結果、果たしてW少年は暁星学園高校を卒業できることになり、しかもめでたく明治大学法学部、政法大学法学部、そして日大獣医学部の合格を勝ち取りました。彼が合格掲示板に自分の番号を見つけるたびに、真つ先に私のところへ報告に飛んできたことはいまでもありません。

W少年はその後、大学を卒業して就職し、やがて会社の社長になりました。

実はW君との付き合いは長らく続き、現在におよんでいます。卒業してから現在にいたるまでの付き合いのほうがはるかに長くなりました。

校長をやっていると、いろいろと子どもが問題を起こし、しばしば教職員会議で停学だ、退学だという話になることがあります。多感で、しかも体力をもてあます中学生、高校生ですから、寮でしばしばけんか騒ぎが起こります。私は心の中では、寮の中でなぐり合をしたっていいじゃないかと思っっています。世の中はすべて平等です。家でも兄弟げんかをするでしょう。そのたびに、

なぐつた人間をいちいち学校の先生にいつけて、退学にしたり勘当したりする親はいないはずす。

誰々がタバコを吸つたという騒ぎも、たまに起こります。

当事者である子どもと会い、どうもこれはW君の力を借りた方がよさそうだというときに、私は彼を電話で呼び、問題を起こした生徒の相談役になってもらいます。たとえば、本人が「学校の先生」に対してはなんとしてもかたくな態度をとり続ける場合です。

W君に来てもらい、タバコを吸つた生徒に引き合わせると、私は「あとは頼む。」といって部屋を出て、彼らを二人だけにします。

子どもはたいがい、初対面の、しかも学校の人間ではない、得体のしれない人物を前にして虚勢をはり、ふんぞりかえっています。話しかけてもそっぽを向いているそうです。そこで彼は、二言三言話しかけて返事がないのを見計らうと、立ち上がって机をたたいて一喝を加えます。

「それが、目上の人間に対する態度か！」

往年の不良少年の面目躍如といつてはあまりにも不謹慎ですが、さすがにたいがいの子どもはひるむようです。でも、まだ子どもはこちらを見ようとしません。

そこでW君はふたたびイスに腰を下ろし、タバコの箱を手にとって、静かに

「吸ってみろ。」

と灰皿とともに子どもに勧めます。

このあたりで、子どもは面食らうようです。頭ごなしに

「タバコなんか吸って、いいと思ってるのか！」

としっかり飛ばされるのが普通でしょう。

しかし、吸ってみろといわれて、吸う子どもはいません。そこでW君は、次のようにいいいます。

「わかった。階段や物陰でこそそこそかくれて吸ったりしないでいいように、おれが校長にたのんでやる。『あいつにタバコを吸うのを認めてやってくれ』と、かけ合ってきてやる。いいな。」

すると、それまでそっぽを向いていた子どもが、たいていは座り直し、彼の方を見るようになるのだそうです。「こいつは自分の敵ではないな」と思い直すのでしょう。そして、それ以後、たいがいの子どもはもうタバコを吸わなくなりませす。タバコを吸うのは大人として見てもらいたいからで、彼らを対等に扱い接してやることで、子どもは強がるのをやめるのだとW君はいいいます。

W君の心の中には、「なんだ、汚いじゃないか」といわれてかまえる気持ちを失い、また「けんかも強そうだな」と認められて妙にうれしかった半世紀も前の思いが、いまま横たわっているのかもしれない。

教育の場での「神」の存在

以前、ある著名な政治家が

「日本には宗教や神に対する概念がない。」

といつているのを聞いたことがあります。日本人には、神という存在を身近に感じる感覚がない。だから、「誰も見ていないからいい」という判断をする。まわりに誰もいなくても、神がいつも自分を見ているという意識があれば、賄賂をやりとりしたり、税金をごまかしたりといったことではきないはずだ、というのです。

また先日、新聞を見ていたら、「宗教『信じない』七割」という見出しが目にとまりました。

読売新聞が国内でこの五月に実施した調査によると、特定の宗教を信じている人は全体の二十六パーセントにとどまったそうです。また、自分の先祖を敬う気持ちを持つ人は九十四パーセントに達し、「自然の中に人間の力を超えた何かを感じる」と答えた人が五十六パーセントであったとのこと。

ふだん「自分は無神論者だから、神も仏も信じないよ」などといっている人でも、つらいときや追い込まれたときなどに神頼みをするところがあるものです。また、人間は死んだら終わりだという

人も、一年に何度かは先祖の墓参りをしたり、そこで手を合わせたりしているものです。形のないものを認めているような認めていないような、日本人の不思議な一面を、このアンケートの結果はうかがわせています。

私は、特に「心の教育」を大切に考えるうえでは、教育の場に「神」という概念がやはり必要なのではないかと考えています。

たとえばカトリックの考え方では、私たちは一人の人間として存在していますが、もう一つ、目に見えないものが我々のそばに常に実存していると考え、それを「神」という言葉で表現します。

さきほどの賄賂の話ではありませんが、「誰も見ていないから」「見つからなければ」という葛藤の瞬間は、大人にかぎらず、どんな子どもにも訪れるものです。そんなときでも「神はいつもそばで見ている」という意識があれば、してもいいこと、してはいけないことを自分で判断することができるでしょう。

現代の子どもたちは、インターネットや携帯電話を身近な道具として操ることで、私が子どもの時分とは比べ物にならないくらい、いろいろな情報を仕入れています。先日、中学の生徒と話をしているとき、驚かされたことがあります。その子どもはクラブの合宿に出かける朝、家を出る前に自分の母親に、

「今日から私はお泊りだから、今晚はパパとママはラブラブだね！」
といったのです。

性にまつわる情報や暴力に関する事など、驚くほどの内容や膨大な量の情報が子どもたちの目の前を流れていて、無造作にいろいろなことを知り、また簡単にアクションを起こすことができる時代だからこそ、子どもたちには、誰から何をいわれることなく、自分自身できちんと善悪の判断ができるようになってほしいと思います。

また、最近では若い人たちが、信じられないような恐ろしい殺人事件を起こしたり、自ら命を絶つたりといったいたましいニュースが連日、新聞やテレビをにぎわしています。「命」というものに対する子どもたちの意識を一刻も早く改めさせていかなければならないのではないのでしょうか。

キリスト教では、天地は神の創造によるとされています。神は天と地をつくり、太陽をつくり、月や星をつくり、海をつくって地上をつくり、動物をつくりました。そして最後に神は、そうした万物を支配する長として、人間を神に似せてつくりました。そこで、私たちの命は神から与えられたものであるから、人の命を傷つけることも、また自分自身の命を粗末にすることも許されない、死後に審判を受けるのだと教えて、命を尊ぶ意識を持たせます。

勉学に向かう姿勢も、カトリックの精神の中から涵養していきます。私たちは、私たち人間は神

に似せてつくられたものとして、神に近づくように努力しなければならぬと説きます。神になることはもちろんできませんが、神に近づく努力をすることはできるし、それが私たち人間と神とのあいだの約束であると導くことで、子どもたちに自らを知的に磨いていくことを一つの哲学として持たせ、自然に勉学に向かう姿勢を獲得することを促したいと願っています。

なお、キリスト教の世界には、懺悔の機会というものが用意されています。人間は弱い者ですから、どうしても罪を犯してしまいます。旧約聖書の中にも「すべての人間は罪びとである」と書かれています。罪といっても、警察のお世話になるようなものではありません。つい小さな嘘をついてしまったりして「どうして、あんなことをしてしまっただろう」と自分の中で反省をすることは、誰にでもあるものです。

そんなふうが悪いことをすると、良心がとがめます。良心というのは神の声です。だから良心にしたがって生きていかなければなりません。つまり、正直に誠実に生きていくことです。しかし、そうしたつらい時間の経験は、誰にでもあるものです。そんなとき、キリスト教の世界では神の前で自らの罪を告白し、許しを乞うようにします。これを懺悔といっています。

実際には教会などで神父に向かって罪の告白を行い、神父は黙ってこれに耳を傾けます。そこでは神父がその内容をいっさい他言しないことが約束されています。「教師間での情報共有」などはいう言葉を持ち出される方もいるかもしれませんが、これは教師による子どもたちの「管理」ではなく、平等な人間どうしの「心のやりとり」です。

気持ち弱っているときや追い込まれたとき、きちんと気持ちを受け止めてくれる場を持っているのとそうでないのでは、大きな違いがあります。

私たちの学校では、多くの子どもたちが寮で生活をしています。一人の人間としてもっとも信頼を寄せる親という存在が身近にいない彼らに対しては、とくに細かなところまで神経をゆきわたらせて接するようにしています。

精神的な背景に「神」を持つことは、微妙で多感な世代にとって大切な支えを得ることにもなるのだと思います。

美しい国、スイス

「神」に対する感覚や意識によって、人々が、そして国が美しさをたたえている例として、私はスイスを知っています。

前の章でお話ししたように、私は二十五歳のときに上智大学を卒業すると、マリア会の辞令にしたがって、スイスのフリブル大学に留学しました。そこで四年間をすごすうちに、スイスという

